

氏名	東海林 克也
学位の種類	博士(社会デザイン学)
報告番号	甲第579号
学位授与年月日	2021年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	神仏習合の願い—社会背景を踏まえた過程—
審査委員	(主査) 大熊 玄(立教大学大学院21世紀社会デザイン 研究科准教授) 萩原なつ子(立教大学大学院21世紀社会デザイン 研究科教授) 内山 節(立教大学大学院21世紀社会デザイン 研究科元教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

目次

序章.....	5
0-1本論文の目的.....	5
0-2神仏習合の概念規定.....	6
第1章先行研究のまとめとアプローチ方法.....	9
1-1神仏習合の先行研究.....	9
1-1-1辻善之助の研究.....	9
1-1-2家永三郎の研究.....	10
1-1-3原田敏明の研究.....	11
1-1-4堀一郎の研究.....	12
1-1-5田村園澄の研究.....	12
1-1-6津田左右吉の研究.....	14
1-1-7吉田一彦の研究.....	15
1-2先行研究の課題と本論文の独自性.....	16
1-3アプローチ方法.....	17
1-3-1日本思想と歴史学・宗教学の重複性.....	17
1-3-2日本思想と歴史社会学・日本文学という重層性.....	19
1-4本論文の構成.....	21
第2章宗教以前の願い.....	23
2-1縄文時代の時代区分.....	23
2-2土偶と信仰.....	23
2-2-1土偶の先行研究.....	24
2-2-2先行研究の考察と検討.....	27
2-3縄文社会のまとめ.....	31
2-4弥生時代の定義.....	32
2-5青銅器祭祀とは.....	34
2-5-1青銅器について.....	34
2-5-2青銅器祭祀について.....	34
2-5-3武器型青銅器についての考察.....	36

2-5-4銅鐸祭祀について.....	36
2-5-5銅鐸についての考察.....	38
2-6農耕祭祀とは.....	39
2-6-1鳥霊信仰とは.....	39
2-6-2鳥霊信仰の考察.....	41
2-6-3鹿信仰とは.....	41
2-6-4鹿信仰の考察.....	42
2-7弥生社会のまとめ.....	43
2-8古墳時代について.....	44
2-8-1古墳時代の定義.....	45
2-9古墳ついで的基本的理解.....	46
2-9-1弥生終末期と墳墓.....	47
2-10古墳祭祀について.....	49
2-11古墳に埋葬された人物.....	50
2-11-1副葬品と被葬者の関係.....	53
2-11-2被葬者と副葬品の関係についての考察.....	56
2-12水祭祀について.....	57
2-12-1水祭祀についての考察.....	60
2-13古墳社会のまとめ.....	62
2-14第2章まとめ.....	63
第3章神宮寺建立と神身離脱説による信仰の変化.....	64
3-1神宮寺と神身離脱説の概念規定.....	64
3-2仏教公伝と社会状況.....	65
3-3神宮寺創建時代と社会不安.....	69
3-4神宮寺創建と個別事例.....	73
3-4-1越前気比神宮寺について.....	74
3-4-2若狭比古神願寺について.....	74
3-4-3多度神宮寺について.....	75
3-4-4奥島神宮寺について.....	77
3-4-5陀我大神（三上神社）神宮寺について.....	77
3-4神宮寺創建のまとめ.....	78
3-5地方豪族と民衆の神宮寺.....	78
3-5-1土地制度変遷とその影響.....	79
3-5-2税制度改革とその影響.....	79
3-6地方豪族による地方支配と地方豪族の苦悩.....	82

3-7第3章まとめ.....	85
第4章『日本霊異記』の神仏習合.....	87
4-1研究方法とその妥当性.....	87
4-2『日本霊異記』編纂当時の社会状況.....	88
4-3『日本霊異記』編纂意図の確認.....	89
4-4『日本霊異記』上巻第一縁と神仏習合との関連について.....	92
4-4-1上巻第一縁における先行研究.....	93
4-5『日本霊異記』上巻第一縁の意義.....	95
4-6上巻第一縁のまとめ.....	99
4-7『日本霊異記』上巻第二縁と神仏習合との関連について.....	99
4-7-1上巻第二縁と狐の関係.....	102
4-7-2上巻第二縁の仏教性.....	104
4-7-3上巻第二縁と神仏習合思想.....	104
4-8上巻第二縁のまとめ.....	105
4-9『日本霊異記』上巻第三縁と神仏習合との関連について.....	106
4-9-1上巻三話縁について.....	106
4-9-2第1段落の検証.....	106
4-9-3第2段落の検証.....	109
4-9-4第3段落の検証.....	111
4-9-5第4段落の検証.....	114
4-10『日本霊異記』上巻第三縁まとめ.....	117
4-11第4章のまとめ.....	118
第5章護法善神説による中央信仰の再デザイン.....	120
5-1護法善神説について.....	120
5-2律令国家における神祇信仰の役割.....	121
5-3中央における神仏習合への道程と社会背景.....	123
5-4八幡神の基本的理解と期待された効験.....	124
5-5八幡神と神仏習合.....	126
5-5-1八幡宮と護法善神説.....	126
5-6第5章のまとめ.....	129
第6章神仏習合思想と御霊信仰について.....	131
6-1菅原道真と御霊.....	131
6-2御霊信仰の概念規定と社会背景.....	132

6-3御霊信仰の普及に関する検証.....	137
6-4道饗祭から御霊会・蘇民将来信仰へ	139
6-5第6章のまとめ.....	142
第7章本地垂迹説による信仰のデザイン.....	143
7-1本地垂迹説の概念規定.....	143
7-2本地垂迹説の萌芽.....	144
7-3本地と垂迹の理論について.....	146
7-4本地仏の設定による神の再デザイン.....	151
7-5本地垂迹説の事例.....	153
7-5-1 両部神道と本地垂迹説.....	153
7-5-2山王神道と本地垂迹説.....	156
7-5-3吉田神道と本地垂迹説.....	158
7-5-4伊勢神道と本地垂迹説.....	161
7-6本地垂迹説と豪族・民衆.....	165
7-6-1民衆の願いと本地垂迹説.....	165
7-7第7章まとめ.....	167
終章.....	169
各章の要約と考察.....	169
結論.....	172
本論文の学術的意義.....	175
本論文の課題.....	175
図表一覧.....	176
引用文献.....	177
参考文献.....	184

本論文は序章、第1～7章、終章から構成されている。

第1章では、先行研究がまとめられ、本論分のアプローチ方法が提示された。

第2章では、神祇信仰の成立や仏教公伝以前の願いは何かという問題、具体的には、縄文・弥生・古墳時代の願いについて論じられている。縄文時代については、その時代の精神的遺物とされる土偶の役割から考察され、弥生時代に生きた人々の願いについて、青銅器（武器型青銅器・銅鐸）および農耕祭祀を鳥と鹿の信仰から考察された。古墳時代を生きる人々の願いについては、古墳祭祀と水の信仰から考察し、権力者の願いと民衆の願いが論じられた。

第3章では、神身離脱説と神宮寺建立がどのような背景のもとで成立・展開したのかが考察され、神仏習合の初期段階について明らかにされた。特に仏教公伝時および神宮寺建立の社会背景が論じられ、地方豪族・民衆が神宮寺に求めた願いが考察された。

第4章では、民衆と仏教の関係から、民衆は仏教をどのように受容し、仏教に何を求めたのかが明らかにされ、この問題が『日本霊異記』上巻第一縁・第二縁・第三縁から考察された。

第5章では、護法善神説に言及しつつ、当時の中央社会の「願い」が明らかにされた。特に八幡神の役割を指摘し、中央社会と仏教集団との権力関係から考察された。

第6章では、中央社会と地方社会とに共通する御霊信仰について、その展開過程や中央社会・地方社会が御霊信仰に求めた願いが考察された。

第7章では、本地垂迹説について、中央社会・地方社会が求めた願いとは何かという問題が考察された。

終章では、各章のまとめ及び全体的な考察や今後の研究課題が言及された。

(2) 論文の内容要旨

(2-1) 本論文の目的

日本において古代の人々は神仏に何を求めたのであろうか。日本における一つの特徴的な現象として、神祇信仰と仏教という二つの「宗教」が融合し、神仏習合として人々に受容されたことが挙げられる。古来、日本の伝統的な信仰は自然を神々として崇拝した神祇信仰であった。その後、仏教公伝により崇仏・排仏論争が巻き起こり、次第に神祇信仰と仏教とが融合し日本における伝統的な神仏習合思想として明治維新まで続いていく。先行研究でもすでに日本宗教の特徴は外来の宗教と在来との信仰が融合していることが指摘されているが、本論文は、いわゆる神祇信仰が成立する以前及び仏教を受容する以前の時代として縄文・弥生・古墳時代の願いを確認しながら神仏習合に焦点を当て、日本において「人々は神仏に何を求めたのか」という問題を考察することが目的とされる。

(2-2) 各章の内容要旨

序章

「神仏習合を通して人々は神仏に何を求めたのか」を解明するための神仏習合の概念を明示。

第1章「先行研究のまとめとアプローチ方法」

神仏習合の先行研究のまとめ・問題点の指摘・本論文のアプローチ方法の提示。先行研究の問題点は、神仏習合の理論研究に重点が置かれており、どのような背景によって神仏習合思想が成立・展開したのか、という部分の考察は多くない。本論文では、中央社会・地方社会・天皇・朝廷・豪族・民衆はそれぞれ神祇信仰と仏教とにどのような関係を結び、どのような願いをもち、どのような精神世界を構成していたのか、その背景も含めて検討する総合的な神仏習合研究である。

第2章「宗教以前の願い」

仏教受容以前の願いを縄文・弥生・古墳の各時代から論じる。縄文時代の代表的な遺物である土偶の役割から縄文時代の願いを論じた結果、子孫繁栄・安産・豊穰・死者の復活といった生きるための現世利益という願いがあった。弥生時代の特徴の一つである青銅器（武器型青銅器・銅鐸）と農耕に関係が深いとされる動物（鳥・鹿）から弥生時代の願いを論じ、その結果、武器型青銅器は辟邪の役割があり、銅鐸は集団沸騰・豊穰・辟邪の役割があった。さらに動物（鳥・鹿）は稲の豊作を願うものである。以上のことから弥生時代の願いは辟邪と豊穰（豊作）への願いであった。最後に古墳祭祀と水祭祀に注目し古墳時代の願いを考察し、その結果、古墳祭祀は葬送儀礼として死者をカミとして昇華し共同体の守護

や繁栄を期待した願いであり、水祭祀は農耕の豊作（五穀豊穰）への願いということができる。

第3章「神宮寺建立と神身離脱説による信仰の変化」

神宮寺建立と神身離脱説についてどのような背景のもとで発生し神仏に何を願ったのか。神宮寺建立前後は政治的動乱や天災による災害により民衆の生きる世界が崩壊の兆しを見せていた時代であった。民衆からすれば自分たち生きる生活環境が改善されるのであれば従来の神祇信仰であろうと仏教であろうともどちらでもよかった。その一方で豪族は本来、神の子孫とされ地域の安泰・五穀豊穰をつかさどる役割を担っていた。この役割が豪族による地方社会統治の根拠であったが、政治動乱や天災によってその根拠が揺らぎ、その結果、神は苦しんでいるという思想になった。そのため豪族の願いは、地域社会の安泰・五穀豊穰という地方の長としての願いと、地方支配権の永続性という二つの願いがあったと言える。

第4章「日本霊異記の神仏習合」

神仏習合がいかなる過程を経て成立・展開したのかを民衆の信仰の変遷を仏教との関係から探り、民衆が仏教に何を求めたのかが、日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』上巻第一縁・第二縁・第三縁を用いて考察された。第一縁は神話的神から仏教説話という神観念の変化、第二縁は民衆に身近な狐信仰と豊作とのかかわりを仏教へと取り込み仏教を身近にするための導入話、第三縁は仏教の優位性を説き神から仏への信仰の移り変わりを表現していた。さらに民衆は従来の神祇信仰ではなく五穀豊穰や生きる社会の安泰という現世利益に対して理論的な説明をする仏教を求めていった。

第5章「護法善神説による中央信仰の再デザイン」

神仏習合思想の第二段階として、中央社会で成立した神は仏教を守護するという護法善神説の成立・展開過程が考察された。当時の社会環境は神祇に国家安泰の祈願をしても成就せず、神祇だけではなく仏教への信仰も必要としていた時代であった。護法善神説の成立は国家鎮護の役割を求めた東大寺大仏建立事業（仏教信仰）を九州の八幡神（神祇信仰）が守護したことが契機となった。この護法善神説は、国家鎮護という願いを、神祇信仰だけではなく、仏教にも託した思想といえる。その一方で仏教側からすれば中央社会の庇護が受けられるという利益が確約され、中央社会も仏教の組織力によって中央社会の勢力を伸ばすという、それぞれの立場から権力の維持という俗的願いがあった。

第6章「神仏習合思想と御霊信仰について」

時代的に神仏習合の第二段階である「護法善神説」と到達点である「本地垂迹説」の間に位置し、また地域的には中央社会と地方社会の間に共通する思想として成立したのが、「御霊信仰」である。この御霊信仰がどのような背景で成立・展開し社会と関わっていたのかが考察される。御霊信仰とは、非業の死を遂げた人物を御霊とし、その御霊が疫病などを引き起こすと考えられており、その御霊を御霊会によって鎮めるものである。ここで疫病などを鎮めるという願いの注目すべき特徴は、御霊会という国家祭祀において神祇祭祀の祝詞奏上よりも仏教経典の読経が優位に置かれていたという事実である。つまり疫病を封じるといふ願いと同時に、中央社会の中での神祇信仰よりも仏教信仰が優位になっている状況といえる。

第7章「本地垂迹説による信仰のデザイン」

神仏習合の到達点である本地垂迹説の成立と展開から神仏に何を祈ったのか。従来、日本の神は自然を中心としたものであり、人々の前に姿を見せることはなかった。しかし神仏習合が展開していく中、11世紀中頃から神の本当の姿は仏であるという本地仏が設定され、神は実態を持った姿として人々の前に現れるようになる。神の姿をした仏像に祈ることは、神仏の境界線がなくなる。ここにおいて本地垂迹説が成立完成した。

本地垂迹説が成立した時代は様々な習合神道を誕生させた。特に習合神道の一つである両部神道は伊勢の神宮の祭神である天照大御神の本地を大日如来とすることで、日本の神祇信仰の根源である天照大御神が仏教と習合するということは、全国に神仏習合思想を流布する重要な出来事であった。本地垂迹説成立・習合神道の登場背景は蒙古襲来などの国家的非常事態があげられる。この事態に中央社会の神社・寺院は国家鎮護の役割や民衆の心を統一する役割もっていた。中央社会は神仏に国家鎮護という現世の利益を求めていたといえる。一方で民衆側も蒙古襲来などの非常事態から日々生きる世界の安泰という現世での利益を求めていた。

終章

各章の要約・考察と全体のまとめと今後の課題の提示。まず仏教受容以前として縄文・弥生・古墳時代の願いが考察された。各時代において多少の違いはあるが共通して見出すことができる願いは豊穰や共同体の安泰という願いであり、日々の世界を生きるという現世利益を求めた願いといえることができる。

その後、仏教を受容し神仏習合が成立・展開していくが、人々の願いは五穀豊穰や国家もしくは地域社会の恒常的安泰であった。この五穀豊穰や国家もしくは

は地域社会の恒常的安泰という根本的な土台の願いのに支配者層は権力の永続性を、民衆は豊かな生活という名の現世利益を追求する一つ的手段として神仏に願ったと言える。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

日本における信仰形態の再デザインとしての神仏習合思想を考察するにあたり、神祇信仰が成立する以前、仏教受容以前である、縄文・弥生・古墳時代から、その完成形である「本地垂迹説」まで、神宮寺建立、神身離脱説、『日本霊異記』、護法善神説、御霊信仰など具体的な論題を丁寧に考察することで、その特質を明瞭に示している点に本論文の第一の特徴である。

長期的な視点で神仏習合成立の過程に焦点をあて、その神仏習合が発生した背景や神仏に人々が何を求めたのか、祈願したのかが考察され、その結果、日本における信仰形態の特徴は、「現世利益」という願いであることが明らかとされている。

既存の神仏習合研究では、すでに上（中央社会）からと下（地方社会）からという二重構造の成立・展開論が指摘されており、本論文でもその二重構造を参考に、その成立・展開の社会的背景が、歴史学的文献史料、文学的文献史料に加え、宗教学的知見を基に考察が進められ散るところに第二の特徴があるといえる。

とくに本論文は、神仏習合を主軸としているが、それが形成されるにいたる諸段階が時系列に論題として挙げられ、それぞれの先行研究を踏まえつつ、神祇信仰側あるいは仏教側からの「思惑」あるいは、中央政府や地方政府（豪族）、また民衆からの「思惑」も視野に入れながら、人々が、何を・どのように願っていたのかが述べられている。

このように、神仏習合思想成立の社会的背景をも視野に入れるため、本論文では、研究の手法として、歴史学・社会学研究の手法、また神祇や仏教という信仰を考える宗教学的手法、民衆の信仰を見るために文学的手法が用いられている。神仏習合思想を、単なる「日本思想」領域での研究にとどめず、神仏習合を発生させた背景、神仏習合に求めたもの（内容）を論じることを目標とした、総合的な神仏習合研究を目指している点が第三の特徴といえる。

(2) 論文の評価

上記「特徴」で示したように、本論文は、一つの学術分野に限らず、また、一つの時代に限らず、総合的な神仏習合研究を企図し、かつ、一定の学術的専門性を有している点が評価される。

また、総合的研究を目指しながらも、各章の各論では、それぞれの分野での先行研究を十分に検討し、新たな知見を示している点も評価されうる。

たとえば、第四章では、『日本霊異記』の第一縁から第三縁を丹念に読み解き、神祇信仰から仏教へという信仰や権力の移り変わりや因果応報による仏教の効験の民衆への喧伝を示すことに成功している。

第五章では、護法善神説成立の契機が、中央社会の国家鎮護の役割を東大寺大仏建立事業（仏教信仰）に助力を求め、九州の八幡神（神祇信仰）が守護したことにあるとし、仏教と神祇信仰のそれぞれの立場から宗教の再編成が考察されている点が評価できる。

第六章では、中央社会と地方社会における御霊会の特徴と願いの異同が、文献に基づいて考察されている点が評価できる。中央としての国家祭祀において神祇祭祀の祝詞奏上よりも仏教経典の読経が優位におかれ、疫病封じが祈願され、また地方としても民衆の御霊会（蘇民将来信仰）が疫病防止のため、神仏習合的要素を持ちながら行われていた点も明らかにされている。

以上が、本論文の評価する点であるが、課題も残っている。論文末および最終審査でも確認をした課題は以下の点である。

日本において仏教受容の後、地方民衆にどのような過程で仏教が流布したのか、という部分が不十分である。仏教流布の過程は古代山岳信仰と修験道が相互関係を持ち地方・民衆に仏教を広げていった。しかし本論文では仏教がある程度流布した過程から考察が始められたため、当時の人々が仏教自体に何を願ったのかという部分が述べられていない。人々の願いを論じる場合において、仏教自体に何を求めたのかという考察がもう少し必要であった。

古代から中世にかけて生きた人々の願いが「現世への願い」と最終的にまとめたが、「来世信仰」についての言及ができていない。特に浄土教は奈良時代に伝えられており、平安初期になると民衆にも広く流布されていた。本来仏教の全国的な流布と同時に神仏習合思想が成立する一つの条件であったにもかかわらず、考察をすることができなかった。

上記の「来世信仰」についてと関連し、本論文の鍵概念である「現世利益」についての考察が不十分であった。ここで言われる「現世」とは、輪廻転生し生ま

れ変わることになる「この世界」が含まれるが、その概念定義が不十分である。特に縄文・弥生などの古代において、アニミズム（靈魂）的世界観を有していた人々が、後代と同じく「現世利益」と言えるのかは、まだ考察が必要である。

上記、評価と課題を総合的に考慮したうえで、当該研究分野における学術的価値および質を有する論文であり、博士論文としての水準に達していると評価する。